

細胞診指導医会 会報



No.13 June 1995

千葉大学医学部の細胞診の先駆者 ——河合直次先生と御園生雄三先生——

八日市場市民総合病院 奥井勝二

千葉大学医学部では早くから各診療科で細胞診の必要性を認め、多くの業績をあげている。著者は1992年指導医会報8号に、滝澤延次郎先生と細胞診と題して投稿したが、今回はその続報として、恩師河合直次先生と御園生雄三先生を偲び、その業績を紹介する。

現在両先生のご指導・先見性によって、附属病院第1外科・産婦人科・肺癌研究施設・千葉県がんセンター・千葉県対癌協会などにおいて細胞診は大きく発展し、多くの指導医・細胞検査士も育っている。先人の努力のあとをふりかえり、感謝の気持を捧げる。

河合直次先生（写真1）

恩師河合直次先生は、明治27年(1894年)岐阜市のお生れで、東京芝中学校、第八高等学校(旧制)を経て、大正10年東京帝国大学医学部を卒業され、外科学の基礎としての細菌学を横手千代之助教授・竹内松次郎教授から指導を受けられて、大正13年外科学教室に移られ、近藤次繁教授ならびに青山徹蔵教授の厳しいご薫陶を受けられた。昭和2年千葉医科大学外科学主任教授の高橋信美先生の外国留学中助教授として、大学昇格間もない頃教室に勤務された。昭和4年ドイツ、イタリア、米国に2年間留学されている。昭和9年には青山教授の推薦で、長崎医科大学外科学教授に就任、



写真1 河合直次先生

昭和12年東京通信病院外科医長、昭和16年千葉医科大学教授に就任された。戦後動乱期を経て、昭和23年には附属病院長、昭和34年停年退官、千葉大学名誉教授、成田日赤病院・日産厚生会玉川病院の顧問、昭和39年千葉労災病院初代院長などを歴任した。この間日本胸部外科学会会長・日本外科学会会長・日本肺癌研究会長(現在の肺癌学会)なども務められ、千葉大学在職

中、毎日賞を受賞され、これが基金となって、千葉大学医学部肺癌研究施設の発足をみた。

先生のご性格は温厚・篤実、声を大にして叱るようなことはないが、心に秘めたことは絶対に変えることはなく、診療態度は厳しく患者の立場で物と考えられた。適応はきわめて厳しかった。これは恩師の青山教授に教えられたことが多かったと申されている。したがって研究態度も厳正そのものであった。

私ども同級16人が河合外科に入局したのは、昭和29年5月であり、その翌年昭和30年春京都での日本外科学会総会で先生・篠井金吾（東京医大）・石川七郎（慶応大学）の3者で宿題報告“肺腫瘍”を担当することになっており、教室をあげてその準備に当たっているときであった。当時肺癌の診断は胸部X線検査、気管支鏡検査、確診は喀痰の細胞診などであり、喀痰の細胞診陽性率は低率で、切除可能症例の診断が要望されていた。それで土手内守人は気管支擦過法によって細胞採取を行い、陽性率の向上をみた。その成績は“選択的気管支擦過法による肺癌診断の研究”という論文を1957年、胸部外科10巻に発表した。その後著者は“肺癌細胞の細胞化学的研究、細胞の構造異型について”、澤田勤也は電子顕微鏡で肺癌細胞の病理形態学研究を、渡辺四郎は位相差顕微鏡による検討を行った。さらに堀江昌平は全身麻酔による気管支鏡検査を考案し、細胞採取を容易にした。これらの研究について河合先生は、「喀痰の細胞は剝離細胞、これは言わば枯葉であり、気管支擦過法で採取された細胞はより新鮮で判定基準をみたす細胞が得られるであろう」とよく申された。

その後千葉大学医学部肺癌研究施設は香月秀雄先生により、大きく発展し、現在は山口 豊教授（日本臨床細胞学会会長）が施設長で、細胞診も活発に行われている。

先生には退官後悠々自適の生活をなさっており、われわれ同期のクラス会によくご出席いただき、ご高説を承っていたが、昭和49年メラノサルコーマ発病、千葉県がんセンターに入院、福間誠吾、澤田勤也医師らの手厚い医療を受けられたが、翌50年3月、80歳の天寿を全うされた。

御園生雄三先生（写真2）

御園生先生は明治42年12月茨城県土浦市のお生れで、旧姓根本氏で生家は小生の家のすぐ近くで、ご兄弟に同年配の方がいて、ご交誼いただいた。茨城県立土浦中学校、水戸高等学校（旧制）を経て、昭和10年3月千葉医科大学をご卒業、産婦人科教室（主任杉山文祐教授）に入局、昭和13年10月教室主任は岩津俊衛教授になり、同教授のもとで、診療、教育、研究に従事された。学位論文は“幼若白鼠パラビオーゼによる脳下垂体前葉ホルモンに対する実験的研究”（昭和20年5月取得）である。



写真2 御園生雄三先生

戦後講師・助教授に昇進、昭和33年5月岩津教授の後任として主任教授になられた。教授就任後は多くの教室員の診療・研究の指導に当られ多くの業績をあげられた。そのうち細胞診に関するものをあげると次の通りである。

- | | |
|----------|---|
| 昭和25年7月 | 癌診断に対する腔内塗抹標本の臨床的価値 |
| 昭和26年4月 | 腔脂膏法における TTC 反応 |
| 昭和27年2月 | 癌の新染色法 TPT 反応 |
| 昭和28年10月 | 腫瘍細胞の診断. TPT による子宮癌の診断（日本病理学会西部会シンポジウム） |
| 昭和29年9月 | 腔脂膏検査の新法 SH 法 |
| 昭和33年3月 | 子宮癌の診断, 細胞学的領域（日産婦総会シンポジウム） |
| 昭和39年3月 | 子宮頸癌の組織化学的研究（日産婦総会宿題報告） |
| 昭和40年6月 | 癌細胞の細胞化学（日本臨床細胞学会総会特別講演） |
| 昭和40年11月 | 産婦人科内分泌疾患の細胞診（日本臨床細胞学会秋期大会特別講演） |

これらは細胞診に関する業績の一部であり、パパニコローの報告が未だ日本に余り普及しないころから子宮癌の診断に細胞診の必要性を認められ、TPT 反応、SH 法を考案し、臨床的に応用されたものである。結論的には SH 法は Sudan III で染色される細胞は、癌細胞ではなく、癌増殖の過程に産生される組織球であることが証明された。SH 反応陽性の細胞が見出されたときには癌陽性のことが多いと結論された。著者も肺癌の患者の喀痰、気管支擦過物に應用したことがある。

これらの知見から細胞化学、組織化学へと研究が発展したと考えられる。この業績は当時の戸沢 澄助教授・高見沢裕吉講師（現名誉教授）ら教室をあげて研

究された成績である。本稿執筆に当り、子宮頸癌の組織化学的研究（第16回日本産婦人科学会宿題報告、1964年3月26日、東京サンケイホール）を久しぶりに通覧した。その内容は多岐にわたり、Cryostatを馳使して、子宮頸癌の酵素群・非酵素群全般にわたって、検索・考察を加えた膨大な内容である。現在この領域も大きく進歩しているが多くの価値ある所見を提示したものである。細胞診に対しても応用されていることも衆知のことである。

宿題報告のおわりの言葉として、「子宮頸部の組織化学的検索を試み、形態学的観察と照合しつつ癌化過程における物質変動の実態を把握せんとした。そして従来の形態学の領域では思いもよらぬ複雑にして多彩なる世界がそこにあることをみた。ここでの研究対象は、生命の根源につながる物質の流れであり、エネルギー代謝である。これら一見奇妙に思われる諸現象の裏には、なお多数の現象が伏在しそれを結びつける整然たる理論が隠されているはずである。この理論の解明される日はすなわち癌の本態が解明される日である」と述べられている。

先生は本務のほかにスポーツ（野球・テニス・ゴル

フなど）・俳句などに優れた才能を有しておられ、野球・テニスは当時医局マッチで常連で、産婦人科教室の黄金時代を達成したお一人である。ゴルフも遅く始められたが上達は早く、教授会メンバーのなかでは最もお上手であったかと思われる。ハンデキャップは15前後であったかと思われる。何度もご一緒した思い出がある。

次に俳句は岬風と号し、加賀谷凡秋先生（千葉大学名誉教授・法医学）に手ほどきを受け、中村汀女・富安風生・高野素十らとも交流があり、花澄という句集がある。立派なもので凡秋・汀女の序文が光っている。二、三の句を紹介すると、

回診の窓の外なる羽根日和（昭和21年）

翠黛の山を重ねて麦の秋

（昭和21年、房州に風生先生を訪ぬ）

母の手を引き清水の花の澄（昭和30年、清水寺）

晩年病魔の冒すところとなり、入院生活を長くされ、定年前昭和48年9月、63歳で死亡された。

改めて両先生のご業績を偲び、ご冥福を祈る。（敬称略）



日本臨床細胞学会近畿連合会の歩み

近畿連合会会長（大阪がん予防検診センター）野田 定

日本臨床細胞学会が発足したのは昭和37年ですが、思えば昭和36年、大阪の地において第2回日本婦人科細胞診談話会が開催され、当時大学院生でありました私もそれに参加しておりましたところ、フロアより婦人科以外の多数の先生方の活発な発言が相次いでいたことを覚えております。そしてそれがきっかけとなって単に婦人科だけでなく全科を対象とした学会、すなわち日本婦人科細胞学談話会と東京細胞診研究会およびその他の細胞診同好会が合流して日本臨床細胞学会がその翌年に正式に発足した次第であります。

全国学会発足後、十数年を経て近畿地方においても医師・スクリーナーの会員数が増加し近畿に支部を作ろうという機運が盛り上がりました。設立発起人は服部正次先生（元大阪府立成人病センター研究所所長）が中心となられ、昭和55年に日本臨床細胞学会近畿支部が発足しました。そのときの設立発起人は、岡田慶夫、小畑 義、岸上義彦、榎木 勇、武内久仁生、田中 敏、西 陽造、西川義雄、野田起一郎、野田 定、服部正次、平井 博、松田 実、松浦 覚、水野潤二、安田迪之、吉田吉信（敬称略、アイウエオ順）の先生方でした。

当時は、学術集会を近畿支部セミナーと呼んでおり、第1回のセミナーは岸上義彦先生のお世話で大阪府立成人病センター講堂で行われました（昭和55年7月31日）。

翌年、服部正次先生が近畿支部長を辞退され、榎木勇先生が支部長に就任されました。以後、近畿支部細胞診セミナーは年2回行われていましたが、その内容は特別講演とスライドカンファレンスだけでした。

やがて昭和60年頃より、各府県単位の日本臨床細胞学会支部が発足し、各府県において学術集会が行われるようになりました。近畿支部細胞診セミナーは昭和61年6月28日の第12回より、日本臨床細胞学会近畿支部連合会細胞診セミナーと改められ、年2回から年1回に変わり平成3年10月26日（第17回）まで開催が続いてきました。

一方、各府県単位の支部学術集会が活発な盛り上がりみせるなか、連合会の学術集会である近畿支部連合会細胞診セミナーが、特別講演とスライドカンファレンスだけでよいのだろうかという声がかかれるようになりました。そこで平成4年12月5日（第18回）より近畿2府4県の各支部会が年1回合流し、近畿全体、合同で開催する新しい形式の地方会として再出発しました。これは特別講演、要望講演、スライドカン

ファレンスがあり、また全国学会と同様に演題募集を行い、口演形式で会を進めたのであります。それはその内容や時間配分をみても、まさにミニ全国学会とも呼べるレベルの高いもので、近畿における会員の実績発表および討論の場となりました。

また平成4年より近畿連合会としての会誌が初めて発行されました。現在、九州、東北、中国四国、関東などで立派な連合会誌が発行されていますが、近畿でも各府県をまとめて記録する形式で会誌が発行されました。

このような近畿地方会として、演題発表、討論、連合会誌の発行など学会の形作りにご努力されたのは以下の先生がたです。一条元彦、岸上義彦、榎木 勇、中島徳郎、西 陽造、野田起一郎、野田 定、松浦 覚、松田 実、松本正朗、安田迪之、（敬称略、アイウエオ順）

近畿連合会会長は、発足当初服部正次先生が、その後昭和56年から平成元年までの9年間、榎木 勇先生が、平成2年から平成5年までの4年間、松田 実先生が立派に職務を果たされてまいりました。そして平成6年より不肖野田 定が引き継ぐことになりました。日本臨床細胞学会が発足して早や30数年が経ち、その間、細胞診領域の発展は目を見張るものがあり学会活動自体も急速に膨張してまいりました。そこで私が考えるに、都道府県単位におけるActivityを地域ごとに集約し、その活動の成果をより実りあるものとするための一つの試みとして、地理的、行政的な割り振りで地区連合会が発足したのであり、それをさらに拡張発展してゆくには、その中核となる活発な組織力が必要であるということでありました。その線に沿って近畿連合として、新たに理事・評議員制度を設けることを平成6年の役員・幹事会に提案し承認されました。これにより地方会としてより活発な動きを展開する予定です。以下は平成7年現在、日本臨床細胞学会近畿連合会として重要な役務を担当されている方々です。

役員：野田起一郎、榎木 勇、野田 定、安田迪之、小畑 義、馬淵義也、松本正朗、植木 実、中野 博、松田 実、小林忠男、南雲サチ子
監事：桜井幹己、松浦 覚

幹事：池田正典、岸上義彦、中島徳郎、山片重房、指方輝正、武内久仁生、長谷川和男、横田栄夫、西川義雄、岡部英俊、土橋康成、鷹巣晃昌、竹田繁美、成瀬靖悦、森川政夫、布引 治、山本格士、高橋満智子、田中八千代、宮木康夫、伊藤寛子、片岡秀夫、中山啓三、稲本和

男（敬称略，順不同）。

わが近畿連合会は歴史的、文化的にも結び付きが深く強い地域性を誇っていますが、この基盤の上に各府県の会員の皆様の努力を結集し、近畿連合会としての独自の成果をあげてまいりたいと存じます。

その目的のためには具体的に、1. 学術集会のさらなる充実発展。2. 構成各支部間の相互情報交換のシステム化。3. 関連学会との関係強化。4. 近畿連合会の日本臨床細胞学会への発言力の増加（具体的には、評議員、理事などの学会役員の強化）。5. 老健法に関する事業について行政への関与度、発言力の増加などを考えております。夢、大にして理想の実現には道なお遠しの感があり、またいろいろな困難もあるかと存じますが、この道にのめり込んで30有余年、残された時間のある限り全力を尽くしてさらなる発展を目指し頑張りたいと存じております。以上。

付記 近畿連合会の主な記録（以下敬称略）

（平成7年3月1日現在）

①連合会事務局所在地

〒537 大阪市東成区中道1丁目3-3
大阪府立成人病センター細胞診断科内
TEL 06-972-1181 内線 2118

②会員総数 821名

- 1) 医師会員 250名
- 2) 技師会員 571名

③歴代会長

- 1) 日本臨床細胞学会総会
水野潤二（第4、6、12回）、千田信行（第8回）、
足高善雄（第10回）、滝 一郎（第14回）、榎木 勇
（第23回）、野田起一郎（第28回）。
- 2) 日本臨床細胞学会秋期大会

服部正次（第11回）、榎木 勇（第15回）、野田起一郎（第18回）、松田 実（第29回）、野田 定（第31回）。

④近畿連合会学術集会長（世話人を含む）

1～3回 岸上義彦、4回 安田迪之、5回 西川義雄、6回 西 陽造、7回 松浦 覚、8回 吉田吉信、9回 野田 定、10回 安田迪之、11回 横山泰、12回 西 陽造、13回 松浦 覚、14回 吉田吉信、15回 松田 実、16回 安田迪之、17回 一条元彦、18回 松田 実、19回 松本正朗、20回 松浦覚、21回 馬淵義也（予定）

⑤各府県支部長

大阪 野田 定
兵庫 松浦 覚
京都 小畑 義
奈良 中野 博
和歌山 馬淵義也
滋賀 松本正朗

⑥学会賞受賞者

服部正次、水野潤二、野田起一郎、千田信行、
榎木 勇、滝 一郎、松田 実、野田 定、
田村 宏、藤森速水、横山 泰、川井一男、
岸上義彦、塚原英克、植木 実。

⑦技師賞受賞者

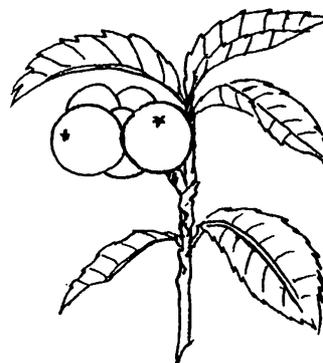
竹田繁美、津崎和子、藤永哲史、奥本 隆、
小林忠男、南雲サチ子、阿倉 薫、岩 信造、
片岡秀夫、山本格士。

⑧国際学会賞（医師）受賞者

水野潤二、野田起一郎。

⑨国際学会賞（技師）受賞者

南雲サチ子、小林忠男。



細胞診と宇宙飛行

慶應義塾大学医学部病理学教室 向 井 万起男

1993年12月1日から1994年12月31日まで、私はアメリカのテキサス州ヒューストン市にある M. D. Anderson Cancer Center の病理に留学していました。その留学生活が終盤にさしかかったころ、この原稿の依頼を受けました。アメリカ留学で経験したことを書けということでした。しかし、正直なところ、人選を間違えているのではないかと思いました。というのは、細胞診の指導医の会報というからは、細胞診に関してアメリカで経験したことを書くべきと思ったからです。ところが、私の留学は自分の専門領域である軟部腫瘍の研究をすることと、アメリカの外科病理学の実情を肌で感じることが目的であって、特に細胞診に重きを置いたものではなかったのです（誤解のないように断っておきますが、私は常日頃は細胞診に重きを置いています。たまたま、今回の留学に限って細胞診に重きを置いていなかっただけということです。念のため）。というわけで、私は一体何を書いたらいいのかということになってしまうわけです。しかし、私に原稿依頼を持ちかけて下さった大先輩のA先生のお話を伺ってみると、私が書く原稿の内容はすでに“上層部”で私の意向とは関係なく決められていることを悟りました。A先生のご意見は、こうだったのです。

「まあ、何を書いてもいいことになってるんだけど、それでも、まあ、君の場合は奥さんの宇宙飛行に関する事で何か書くのが一番いいんじゃないのかって皆さんいってるよ」

自分の肩書きが今や「宇宙飛行士の旦那」だけになってしまっていることを強く自覚している私は、こういうことをいわれても別になんとも思わないという恬淡とした境地に達しているのです。そういう内容の原稿を書くことを素直に承諾しました。が、しかし、「宇宙飛行士の旦那」の私にだって、男の意地というものも多少は残っています。私だって、一応、日本臨床細胞学会会員ですし、一応、指導医のはしくれです。私にも、女房がらみのことを書く前に、ちょっとくらいは細胞診のことも書かせて下さい。私は留学中に細胞診に関して驚いたことがあるのです。

M. D. Anderson Cancer Center は、留学した私というと生意気かもしれませんが、全米の病院ランキングで毎年ベストテンに入っている病院ですので、若い病理医（20代後半から30代前半）に大変人気が高く、ここで人体病理学の修行をしたいという病理医が全米から相当応募してきます。そんな中から選ばれているので、この病院には、やる気まんまんで優秀な若い病

理医達が揃っています（私は外国からのトシいった病理医なので、優秀かどうかとは無関係です。念のため）。そういう優秀な若い病理医達はみんな、細胞診を習熟することに非常に熱心です。べつに、このことに驚いたわけではありません。驚いたのは、ここから先です。若い病理医達は全員優秀ですが、私からみて、特に優秀なのが2人（B君とC君）いました。若い病理医達の修行期間が終わって、新しい年度の若い病理医達と交代するときがきたとき、この2人だけが、もう1年残ることになりました。ナント、2人は、この病院で細胞診だけを1年間みっちり勉強したいので残るというのです。これを聞いた私は、“へえ、アメリカの優秀な若い病理医は細胞診だけの勉強のために、そこまでするのかいな、日本とは違うなあ”と驚いてしまいました。なんで、そこまでするの？という質問をC君にぶつけてみました（B君は、いかにも東部エリート風なので、とっつきにくい感じがあるのですが、C君は軽いノリで生きている感じがあって、妙に私とウマが合って仲良くなってしまったのです。C君はガールフレンドと同棲しているのですが、そのガールフレンドは国際線スチュワーデスで、日本へのフライト勤務に就くことが多いらしく、そんな関係から、C君がもともと日本人に親近感を持ってきていたというのも私達が仲良くなった理由です。どうでもいいことですが、優秀な若い病理医が国際線スチュワーデスと同棲中なんて時代が日本にも早く来ないかなあなんて思っています）。で、C君の答。

「だって、細胞診って重要だから。1年くらいは細胞診だけをみっちり勉強するのは当たり前ですよ。日本では、そういう勉強しないの？」

ちょっと焦った私の答。

「いやあ、細胞診の勉強だけを1年間もみっちりする病理医って日本にもいるのかもしれないけど、オレは知らないなあ」

「じゃあ、ドクター・ムカイはしてないわけ？」

「ああ、オレはしてないよ」

「じゃあ、ドクター・ムカイは、どうやって細胞診を勉強したわけ？」

「そうねえ、なんとなく身に付いたってところかなあ…」

要するに、私は、とてもバツの悪い思いをしたわけです。そして、内心、“こりゃヤバイぜ。日本の病理医も、これからは相当根性入れて細胞診を勉強しないとイケねえな”と痛感した次第です。こういうことを痛

感しただけでも、今回の留学には意義があったというもんです。

さて、私の意地も一応通したので、次に本題。私の留学先の病院は、“偶然にも”，女房が宇宙飛行に向けて訓練をしていた NASA ジョンソン宇宙センターのあるヒューストン市にありました。で、“ラッキーなこと”に、私は訓練中の女房と同居しながら留學生活を送れたというわけです。さらに、女房が乗り込んだスペースシャトルの打ち上げ、帰還の際には、病院から休みをもらって、乗組員の配偶者としての務めを果たすべく、このフロリダのケネディー宇宙センターに出かけるというようなこともしていました。トシといった病理医の留學生活とは別に、スペースシャトル乗組員の配偶者としての生活も同時に送っていたわけで、それはそれで大変ではありましたが、忘れられない思い出となる経験を数多くすることができたという面もあります。私が経験したことを少しだけ書いてみようと思います。

1. アメリカ人宇宙飛行士について

私は、女房と一緒に宇宙飛行をした6人のアメリカ人宇宙飛行士達はもちろんのこと、それ以外のアメリカ人宇宙飛行士達とも接する機会が結構ありました。しかし、アメリカには100人を越す現役宇宙飛行士がいるので、私が接したのは、あくまで、その一部に過ぎないということになります。というわけで、アメリカ人宇宙飛行士とはこういうものだ、などと偉そうなことは私はいえません。で、ここでは、私のきわめて個人的な印象の一つだけをいっておきます。それは、野球のことです。どういうことかという、やけに野球が好きな宇宙飛行士が多いのです。なにしろ、宇宙飛行士だけの野球チームを作って、ヒューストンを本拠地とする大リーグ球団ヒューストン・アストロズとアストロ・ドーム（世界初の屋根付き野球場）で親善試合までしちゃったりしているくらいなのです。まあ、大リーガーの方は地元民へのちょっとしたサービスくらいに考えて軽い気持ちで楽しんでいるだけですが、宇宙飛行士チームの方は、夢にまでみた大リーグ球団との試合ということで、宇宙飛行のときよりも真剣に燃えちゃったりしているのです。ところで、私も野球好きがいいます。私の一番大事なモットーは、“病理医としては2流であってもいいが、常にアメリカ大リーグ野球について一番詳しい病理医であり続けること”です。自慢じゃありませんが、私は病理学についてよりもアメリカ大リーグ野球について異様に詳しいのです。これが一体何を意味するかというと、アメリカ人宇宙飛行士達と私の間で大リーグ野球談義に花が咲くということです。日本人のくせに大リーグ野球に詳しい私のことをアメリカ人宇宙飛行士達は最初のうちは気持ち悪がっていましたが、そのうち、私と会うたびに大リーグ野球に関する情報交換を真剣に交わすようになったのです。今から振り返ると、私はアメリカ人

宇宙飛行士達と野球の話ばかりしていたような気がするくらいです。自分の出身州の大リーグ球団の帽子を私にプレゼントしてくれる宇宙飛行士や、野球に関する本を私にプレゼントしてくれる宇宙飛行士までいました。私はアメリカ人宇宙飛行士達との交流を思い出すとき、いつも、呟くのです。“あいつらって、野球が大好きな実にイイ奴らだったよなあ”。

2. アメリカ人宇宙飛行士の奥さん達について

アメリカ人宇宙飛行士の配偶者達（大部分が奥さん達ですが）は、なんだかんだと理由をつけては、しょっちゅうパーティーを開いたりして親睦を深めています。宇宙飛行士が一緒のパーティーもありますが、配偶者だけのパーティーというのも結構あります。で、宇宙飛行士の配偶者達は全員が顔見知りという間柄になっているのです。宇宙飛行士の配偶者である私も、そういう仲良しグループの輪の中に入らなければならなくなったわけですが、配偶者だけのパーティー（つまり、奥さんだらけのパーティー）に出てみると、ナント、奥さん達が寄ってたかって私の相手をしてくれるではありませんか。“オレって、日本とは違ってアメリカでは女性にモテるのかなあ”と嬉しくなっちゃいましたが、冷静に考えてみると、どうも、これは、奥さん達が私のことを気に入ってくれたためというよりは、宇宙飛行士の世界に突如現れた初の東洋人男性配偶者が物珍しかっただけということのようです。ところで、こういう奥さん達の輪の中に入るにあたって、私の方は最初は多少緊張感もあったのですが、すぐに慣れてしまいました。だって、当たり前といえば当たり前ですが、宇宙飛行士の奥さん達といっても、日本の普通のおばさん、おねえちゃんと全然変わらないのです。私は、むしろ、あまりに全員が普通なので驚いてしまったくらいです。一言でいうと、みんな実に堅実で地味な女性です。そして、奥さん達は亭主を尻に敷いている感じがあります。要するに、大変健全な感じがするのです。パーティーにおける私と奥さん達の会話も、気が付いてみると、いつのまにか、物価のこと、亭主の給料のことなんかが中心になっていました。

3. 宇宙飛行士でもない私に対して NASA がしてくれたこと

これは、もう、空前絶後としかいいようがありません。なんで NASA は配偶者にすぎないオレをこんなに大事に扱ってくれるの、と恐縮しっぱなしでした。数え上げたら切りがないのですが、参考までに、いくつか例をあげておきます。

ジョンソン宇宙センターの門には拳銃をぶら下げた係官がいつも立っていて、厳しく人の出入りをチェックしているのですが、私はいつでも好きなときに一人で出入りできました。さらに、私は宇宙飛行士室（宇宙飛行士全員のオフィスがある所）にまで自由に出入りすることができました。さらに、ジョンソン宇宙センターには宇宙飛行士の健康をチェックしているクリ

ニックがあるのですが、もし私が病気になれば、そこで無料で診てもらえることにもなっていました(私は、ずっと健康だったので、診てもらったことはありませんが)。そして、さらに、宇宙飛行士のシミュレーション訓練というのは普通見学できないのですが、私は見学させてもらえたところか、作動中のシミュレーション訓練装置の中にまで宇宙飛行士と一緒にしてもらえました。ここまでしてくれると、そろそろ、なんか申し訳ないなあという感じが湧いてきましたが、まあ、いいか、ご好意に甘えちゃおうと、と甘えていました。

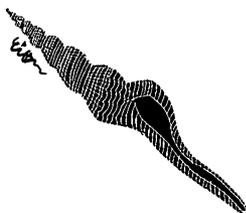
乗組員は打ち上げの一週間前から世間から隔離されるのですが、こんなときですら、なぜか、妙に配偶者だけは特別なのです。私は隔離場所に入れてもらえて、夕食だけは毎日女房と一緒にとれるのです。また、いよいよ女房が乗り込んだスペースシャトルが打ち上げられるというので、私もヒューストンから、スペースシャトルの打ち上げが行われるフロリダのケネディー宇宙センターまで移動しなくてはならないというときには、私は自宅ですべて待っているだけでいいのです。NASAの係官が自宅まできてくれて、車で飛行場まで運んでくれて、さらに、NASA専用ジェット機で運んでくれるのです。もちろん、運賃はタダ。ここまでくると、開いた口が塞がらないというか、もうビックリ仰天という心境になってきます。これは一体なんなんだ、という感じ。配偶者って、そんなに大事だったかなあ、と考えさせられてしまうのです。女房に対する自分の常日頃の態度を思い出して、ちょっと恥ずかしいという感じすらしてきます。これからは女房をもっと大事にしねえといけねえなと思えてくるのです。で、このNASAの配偶者に対するサービスは、デキの悪い配偶者が反省するようにと宇宙飛行士とNASAがつるんでやってるんじゃないか、と疑いたくもなってきました。しかし、NASAは、そんな私のウシロメタイ気持ちなどお構いなく、えんえんとサービスを続けます。

こうしてタダでフロリダに到着した私は、NASAが用意してくれた豪華な宿泊場所にタダで宿泊。このへんからは、なんか自分の生活感覚が麻痺してくるようで、恐い感じ。打ち上げ2日前には、人里離れた海岸のそばにあるビーチハウスで乗組員と配偶者だけで数時間ゆっくり過ごさせてくれました。しかし、女房と私は、それまで毎日会っているのに、別にすることも

話すことも大してなくて手持ち無沙汰。情熱的に抱き合ったりしているアメリカ人乗組員と奥さん達をポカーンと眺めたりしていました。打ち上げ前日は、乗組員と一緒にスペースシャトルが立った打ち上げ台を見学。私も打ち上げ台の上に立たせてくれるのです。そして、その後、またしても、人里離れた海岸のそばのビーチハウスで乗組員と配偶者だけで数時間。女房と私は、やることないので、海岸で貝殻拾いをしました。この辺になると、女房に向かって、“なあ、おまえ、もう、そろそろ宇宙に行ったら”といたい心境にもなってきます。で、打ち上げ当日を迎えるわけですが、女房は、その日の朝、普段通りの声で私に電話をかけてよこして、普段通りの“行ってきま〜す”という感じで元気に宇宙に出かけて行きました。

女房が宇宙飛行中も、NASAのサービスはとどまるどころを知りません。私は宇宙にいる女房に毎日ファックスで手紙を送れるというのです。そういわれると、毎日送らないと悪いというか、怒られるような気がしてきて、ホントに毎日送っていました。さらに、ときどき、“マキオ、元気？何か困ったことない？困ったことがあったら何でもいってね”なんて優しい電話がNASAからかかってきたりもします。そして、いよいよ、とどめの一発がきました。ある日、私は宇宙にいる女房と5分間にわたって直接交信をさせてもらったのです。それも、いたれりつくせりという感じで、つまり、大勢の管制官がいる管制室では話しにくいだろうとの配慮から、隣の別室で、しかも、管制官も誰も盗み聞きできない特別回線で。私のまわりには、宇宙飛行中の宇宙飛行士の健康状態をチェックするNASAの医師だけがいましたが、私と女房の日本語の会話の内容は理解できないはずで、そして、交信を終えた私が部屋を出ようとすると、医師が私にそっと、ある物を渡してくれました。それは、女房と私の交信を録音したテープでした。女房と私の思い出になるようにと、二人の交信を録音してくれていたのです。NASAが私にしてくれたことすべてに、私は、とても感謝しています。しかし、その中でも、一番感謝していることは、このテープです。私は、10年後、20年後に、女房と二人だけで、このテープを静かに聞きたいと思っています。

NASAが私にしてくれたこと、それは、配偶者とは一体何なのかということ私に考え直させてくれたことです…。



一 所 懸 命

——細胞診狂祖物語——

獨協医科大学名誉教授 山 田 喬

年を取ると「昔の話」を言いたがると人はいうけれど、今回限りとお断りしてから若い頃から始まるこの話しを書かせて戴きたい。

時は昭和31年、外科学教室の新入医局員として働いていたところである。病棟に置いてあった小生の獨英和辞典に誰かが落書をした。小生の署名のうえに、“細胞診狂祖”と書いてあった。

昭和20年代に、双葉山や呉清源らの有名人が信者となって話題になった自光尊という女性新興宗教の教祖が評判になったころであったから、教祖を振って、“教”を“狂”に変えて面白半分にしたものであろう。

人に教わることも、教えることもない細胞診の時代のことである。もちろん日本臨床細胞学会も発足する以前のことである。当時細胞診を行う者は、すべて重力に逆って仕事をせねばならなかったから、小生の行動には執念ともいうべき気迫があったのかもしれないし、あるいは本当に狂気の沙汰と映っていたのかもしれない。

けれどこの落書にはあまり腹が立たなかった。それだけ小生は細胞診に打ちこんでいたことの証明のような気もしたし、またもう一つの理由があった。

小生が初めて手懸けたのは胃癌の細胞診であったのだが幸いというか、不幸にもというべきか、この時期には胃癌の早期発見はきわめて困難であった（いまだ早期胃癌の規準も確立していなかった）。特に胃噴門癌はかなり進展していても、細胞診以外によっては発見できない例が少なくなかったし、また小さい癌からも癌細胞を採取できたので、細胞診こそは最もすばらしい診断方法であると意気軒高たる気分であったから、この“狂祖”と書かれたことが逆に誇らしくさえ感じたのであった。

しかし昭和30年代の後半には、胃癌のX線、内視鏡的診断は著しく発展し、一般に普及することになった。それに伴って逆に胃癌細胞診の役割は終ることになった*。しかし他方その頃になって細胞診は婦人科のみならず、各科領域にも広く行われるようになり、消化器領域は漸次その対象を脾・肝・胆領域に向けられるようになってきた。

そして昭和36年に婦人科細胞学懇話会として発足した研究会は昭和38年には、東京細胞診研究会と合体

し、日本臨床細胞学会となった。

小生も消化器領域のみならず、各科領域の細胞診に従事することになり、昭和35年には病理学教室に移り、より病理組織学に基礎を置いた細胞診の研究と実際に従事することになった。

それから約10年後の昭和43年のある日に突然ある出版社の主人が小生を訪ねて来た。細胞診の本を書いてくれとのこと。けれど当時、本を書こうという積極的意欲が小生自身にあったわけではなく、その返事に窮していたのであるが、「剝離細胞診の過去と現在については先生はよく知っているはずで、今こそ細胞診断について自分の考えをすべて吐き出し、自分なりの筋の通った Story (物語) を書いて下さい」といわれたとき、小生は急にその気になってきた。そして「宜しい、書きましょう！」と意気込んで返事をするようになった。

しかしそうはいっても、日常の忙しさにかまけて、なかなか筆を取るまでにいたらない。ずるずると数ヵ月を過ぎてしまった。そしてこれは大変なことを引受けてしまったと後悔する始末であった。

そこで苦しまぎれに“分担執筆”を考えてみたり、また「自分のような助手の身分で本を書いても果して売れるだろうか」と心配になり、恩師の教授の名前を拝借しようかなどと余計なことまで考えて、その旨出版社の社長に話してみた。ところが逆ねじをくらわされる破目となった。

「一般の読者の意識は大変進んでいます。もうX大学だの、Y教授などという名前で本が売れる時代ではありません。それよりよい内容を書いて下さい！内容さえよければ本はどんどん売れます」

「本を売るのはわれわれの仕事で、先生の仕事ではありません！」

といわれたとき、小生は電話の前で赤い顔をしてつい「そ、それはそうだ」と吃る結果となった。

気分を無理に奮い立たせて書き始めることになった。そして約二年の悪戦苦闘のあげく昭和45年に「剝離細胞診断学—その臨床病理学的基礎—」なる本が完成し出版することになった。

その後、日本臨床細胞学会は順調に発展し指導医制度も細胞検査士制度も確立した。小生も昭和49年に獨協医科大学第1病理学教室に赴任した。そしてますます細胞診を活用し、また多数の症例を経験することになった。そしてやがて大学の停年退職の日も近づいて

この経過については本会報8号8-12頁(1992年)に垣花昌彦が「消化管細胞診盛衰記—何が胃細胞診を破滅の淵まで追いつめたか—」と題して発表しているので参照されたい。

来た。

昭和の時代が終る頃、これまでの細胞診の経験を一冊の本にまとめて停年を迎えたいという気になった。そこで前記の出版社にそのことを話してみた。今度はこちらから投球したわけである。ところが前回とは全く逆の答が返って来た。

「最近の本はなるべくカラー写真を使わなくては売れません。しかもあまり重い本はいけません。なるべく図解を入れて簡単明瞭な本でないとは駄目です。細胞診については検査士の方がよほど勉強していますぞ！」

という返事である。それを聞いて小生は興奮して来た。

「何をいうか！そのような本など書く気はさらさらでない。最近は入門書だのカラーアトラス（小生も分担執筆として出版しているが）などゴマンと出版されているが、そんな本はもう十分だ。それより論理的な病理組織学に基礎を置いた大系的な臨床細胞学の本を書きたいのだ。これまでの国の内外に蓄積された山のような知識を整理してみたいのだ。そのために本が厚くなっても仕方がない。カラー写真などは最低限度で十分だ」

「それが駄目なら本を書かない！」「帰れ！帰れ！」といきり立った。

「それでは出版できません」

かくして出版社との闘争が始まった。そして何度かの論争を経た結果、約2年後についに出版社が折れた。そして最後には

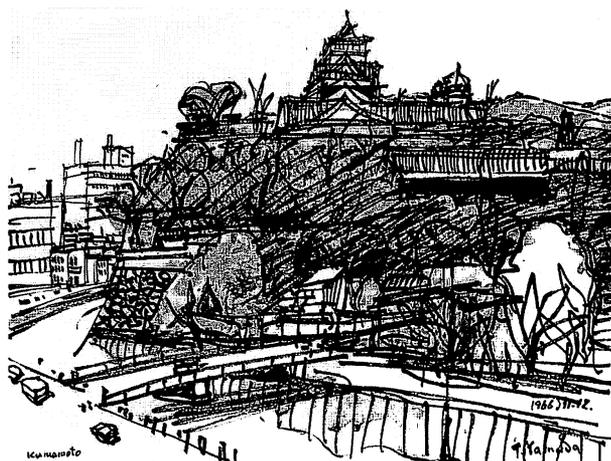
「先生のおっしゃる通りです。思いきり好きなだけ書いて下さい。原稿枚数も白黒写真の掲載も無制限で結構です」

といわれたときは妙に拍子抜けの気分になった。抵抗があるとそれに向かって闘争心が湧くものであるが、それが突然外されると、振りあげた拳をどこに持って行くべきか困ってしまうようなものである。

かくしてついに最後の細胞診の本を書くことになった。前回の「剝離細胞診断学」の執筆のときは比較にならない程に汗を流し、長い時間を費して千枚近く of 原稿を完成した。そしてこの本“細胞病理診断学”のあとがきに次のように書いてみた。

「一生懸命という言葉がある。この言葉は一所懸命という表現から誤用されたもので、わが国では本来“主君から与えられた所領を命がけで守る”という意味に用いられたと聞いています。本書の執筆は正にこの文字通り、一カ所（細胞病理診断学）に集中し、常にエネルギーの消耗のバランスをとりながら、長い時間休むことなく続けることにより完成したものです。そして今、マラソンに譬えるならば、42.195キロメートルを走り抜けたあとで、なお“細胞診”という旗を掲げながら胸を張ってグラウンドを一周するような高ぶった心境で、この“あとがき”を書いています。云々」と。

細胞診狂祖といわれて38年目の平成6年秋についてこの本を完成した。まさに“狂祖”といわれるに應わしい結末であったと思っています。しかしそれが正しいかどうかは、この本を読んで戴いた人々のご批判を俟たねばならないと思います。 「おわり」



熊本城：昭和41年第5回日本臨床細胞学会秋期大会（会長：加来道隆教授，熊本市）の折に描いた熊本城の天守閣と長堀。

1994年度第1回指導医会議事録

日 時：1994年（平成6年）6月2日（木）
場 所：島根県立産業交流会館（くにびきメッセ）
多目的ホール

出席者：701名

司 会：杉森 甫 指導医会会長
議題に先立ち、1993年度第2回指導医会議事録（案）が承認された。

議 題

A. 報告事項

1. 庶務報告

会員数：8,516名（医師3,989名、技師4,464名、図書63件）

指導医数：1,308名（1993年に認定された新指導医67名を含む）

FIAC：96名（1993年 Cytopathologist 試験合格者16名）

MIAC：89名（含む、申請中）

CT (IAC)：3,249名（1993年度試験合格者449名）

CT (JSC)：4,452名（1993年度試験合格者243名）

物故会員

理事：指導医 No. 88 松原丈喜先生（国立療養所志布志病院内科）

医師：指導医 No. 32 長峰敏治先生（長峰産婦人科医院）

医師会員：日外芳孝先生（大阪市）

黙 禱

2. 1993年（平成5年度）会計報告

（野澤志朗 会計担当幹事）

前年度（1992年）より繰越金 6,141,893円

今年度（1993年）総収入 2,348,737円

今年度（1993年）総支出 2,714,371円

次年度（1994年）へ繰越 5,776,259円

① 1993年度会費納入率 78.73%であった。

② 今年度は、指導医会幹事選挙にあたり、印刷費、諸経費が増加したので赤字決算となった。
以上が説明され、承認された。

3. 1993年（平成5年度）指導医資格更新報告

（工藤隆一 指導医委員会委員長）

資格更新該当者：指 No. 1～No. 593

指 No. 900～No. 1005

合計（実数）648名

更新可：614名

（指導医会出席不足者は、次回の更新時まで不足分を補充することを条件として認める）

保 留：10名…病気療養、海外留学、外国人

失 格：24名…更新の意志なし。資格喪失とする。理事会へ報告済。

4. 1994年（平成6年度）指導医資格更新について

（工藤隆一 指導医委員会委員長）

資格更新該当者：指 No. 594～No. 683 90名

指 No. 1006～No. 1101 96名

合 計 186名

資格更新の書類は、11月上旬に学会事務局より該当者各位へ送付する。

更新書類提出期限：12月10日

（指導医会出席シール発行について）

今年度より指導医会への出席を証明するために、シールを発行することになった。後日、台紙を送付するので添付し、更新時には提出すること。

5. 1993年（平成5年度）細胞診指導医試験結果報告

（桜井幹己 指導医試験実施委員長）

日 時：平成5年11月27日（土）

場 所：大阪・江坂研修会館

受験者：84名、合格者：70名（合格率83.3%）

受験者 合格者 合格率%

総 合 科 40名 30名 75.0%

婦 人 科 39名 35名 89.7%

内科・外科系 5名 5名 100.0%

6. 1994年（平成6年）細胞診指導医試験について

（桜井幹己 指導医試験実施委員長）

日 時：平成6年11月26日（日）

場 所：大阪・江坂研修会館

受験申請期間：平成6年7月1日～9月7日

審査手数料：20,000円（今年度より値上げ）

受 験 料：50,000円（今年度より値上げ）

（日臨細胞誌33巻3号公示）

（指導医試験方法）

昨年度の試験では、ガラス標本に重点をおき35ミリのカラーズライドを20題出題した。配点は、

ガラス標本……………20題60点

35ミリのスライド…20題40点

としたが、時間的に困難であったので、やはり本年度からは元に戻し、

ガラス標本…15題60点

35ミリのスライド…20題40点

とすることになった。

7. 1993年（平成5年）第26回細胞検査士資格認定試験結果報告

（長谷川壽彦 検査士委員会委員長）
（第一次試験）

日 時：平成5年11月14日（日）

場 所：東京・大阪・福岡

受験者 843 名, 合格者 465 名 (合格率 55.9%)
(第二次試験)

日 時:平成 5 年 12 月 11 日 (土), 12 日 (日)

場 所:東京・日本都市センター

受験者 465 名, 合格者 243 名 (合格率 52.3%)
(最終合格率 29.2%)

8. 1994 年 (平成 6 年度) 第 27 回細胞検査士資格認定
試験案内 (長谷川壽彦 検査士委員会委員長)
(第一次試験)

日 時:平成 6 年 11 月 13 日 (日)

場 所:東京・大阪・福岡

(第二次試験)

日 時:平成 6 年 12 月 10 日 (土), 11 日 (日)

場 所:東京・日本都市センター

受験料:30,000 円 (平成 6 年度より値上げ)

- ・細胞検査士認定試験の受験資格について
第一次試験に合格し第二次試験で不合格の場合,
翌年に限り一次試験を免除し, 二次試験の受験資
格を与える。ただし, 受験料は同様に徴収する。
平成 7 年度の細胞検査士資格認定試験より実施す
る。

9. 細胞学会渉外委員会報告

(杉下 匡 渉外委員会委員長)

1) 全国の希望する衛生検査所へ発行される㊦マークは, 今後は医療関連サービス振興会で取り扱う
ことに一本化された。

全国を 9 ブロックに分け, それぞれに調査委員を
置くことになる。

調査委員を選出するための準備委員会が設立さ
れ, 指導医 34 名, 細胞検査士 15 名を申請した。
調査委員の任務は, 衛生検査所などの立入調査や
書類調査を行うことになる。選出された先生方へ
は直接, 依頼のお願いをするので協力してほしい。

2) 日本総合検診学会第 22 回大会で, 厚生省老人保
健福祉局の担当者より, 下記の発表があったので
細胞学会としても注目していきたい。

①老健法に基づくがん検診の個人負担額を値上げし
て, 適正化をはかる。

②基本審査 (基本健康審査・がん検診・総合健康審
査) の受診率が低下してきているので, 受診者の
ための利便性を考慮した対策を考える。

イ. 1 日ですべての健康診断が行えるような日程
をくむ。

ロ. 健診利用券を発行し, 予め契約している医療
機関などでいつでも, どこでも健診が受けられ
るようにする。

③成人病検診は現在, 3 官庁で制度化されている。

イ. 老健法に基づく地方自治体の検診。

ロ. 労働省が行う労働安全衛生法に基づく事業体
の検診。

ハ. 社会保険庁が行う保健施設事業に基づく検
診。

これらがお互いに相互乗り入れして, 将来は一
本化しようという考えである。

④老健法事業の新規事業として, 検討中である。

イ. 肝臓ガン検診の実施

ロ. 前立腺ガン検診の実施

ハ. 骨粗しょう症検診の実施

10. 社会保険委員会報告

(植木 実 社会保険委員会委員長)

診療報酬が大幅に改正され, 実質 2.7% の診断料が
値上げされた (4 月, 10 月)。

1) 細胞診関係

イ. 婦人科標本→現状維持

ロ. その他の標本→210 点 (10 点増)

ハ. 迅速細胞診→新設ならず。ただし, 迅速病理
が増点となった。

細胞診採取料 頸部 30 点,

細胞診判断料 105 点 (月 1 回)

体部 350 点

2) 病理関係

イ. 病理診断料→210 点。新設された。

ロ. 病理組織迅速顕微鏡検査→1 手術につき 2500
点 (300 点増)

ハ. 病理組織顕微鏡検査→1 臓器につき 900 点
(100 点増)

・細胞診, 病理関係が減点されずに増点あるいは新
設されたことは, 今回の改正が医療の技術面を重
視した結果だと考えられる。

・次回の改正には, 細胞診の減点を防ぐと同時に,
術中細胞診・特殊染色標本や呼吸器関係標本の診
断料新設を目指していきたい。

・婦人科関係では正式な採取料がみられないとの指
摘があり, 検討課題としていく。

・日本医学会へ加盟していないと迫力が弱いとの意
見もあり, 加盟実現されることを希望する。

11. 指導医会名誉顧問推戴について

1) 指導医会会則第 7 条により, 指導医会に功績の
あった先生に対し顧問の称号を与えることが承認
され, 指導医会会長より推戴状が授与された。

信田重光先生

野田起一郎先生

天神美夫先生

山田 喬先生

推戴者を代表して, 山田 喬先生挨拶。

2) 昨年度の推戴者

栗原操寿先生

高橋正宜先生へ推戴状が授与された。

12. その他

1) Cytopathologist 試験案内

日 時:平成 7 年 7 月 23 日 (日)

場 所：日本都市センター

受験資格：MIAC になってから3年後

2) 国際細胞検査士試験案内

日 時：平成7年7月23日(日)

場 所：日本都市センター

受験資格：平成6年度細胞検査士資格認定試験合格者も受験できる。

3) 会計監査について

指導医数の増加とともに指導医会会計が大きくなり監査を受ける必要がある。

細胞診指導医会規約改訂を伴うので、次の指導医会で報告する。

4) 指導医会役割分担について

あり方委員会：(委員長) 矢谷隆一

細胞検査士資格更新審査委員会：

(委員長) 長谷川壽彦

庶務担当幹事：加藤治文

会計担当幹事：野澤志朗

渉外担当幹事：杉下 匡

学術担当幹事：柴田偉雄

指導医資格更新相談窓口：森脇昭介

訴訟、紛争処理窓口：東岩井久

幹事会の世話人として、藤本郁野先生、山内一弘先生をお願いすることになった。

正式な名称は、次の指導医会にて報告する。

5) 指導医会への出欠をアンケート方式で行い、提出された意見をあり方委員会で審議した。

アンケート結果については、指導医会報にのせていきたい。

6) 指導医会会報 No. 11 号が発行され会場にて配布された。

新編集委員会構成

委員長：柴田偉雄、副委員長：長谷川壽彦

委員：藤井雅彦、垣花昌彦、坂本穆彦

山内一弘

B. 協議事項

1. 細胞検査士資格更新審査委員会報告並びに提案事項について

(長谷川壽彦 細胞検査士資格更新審査委員長)

1) 1993年(平成5年度)資格更新報告

該当者：1,047名

更新可：1,005名

保 留： 4名(3名=外国在住、1名=出産育児の為、1年間の猶予を与える。

次の更新時に合わせて点数を満

たすこと。)

失 格：38名 点数不足。

2) 細胞検査士の資格更新には、必ず指導医が関与し、指導している検査士の状況を把握してほしい。長期療養や止むを得ない理由で更新不可能と思われる事態には、指導医を通じて申し出があれば、審査委員会に計ることもありうる。

2. あり方委員会報告並びに提案事項について

(杉下 匡 前あり方委員長)

1) 新委員構成員

委員長：矢谷隆一、副委員長：坂本穆彦

委員：半藤 保、池田正典、猪狩咲子

垣花昌彦、柏村正道、工藤隆一

永井 宏、坂井英一、山片重房

福永真治、林 永信、広岡保明

和泉 滋、小塚正雄、落合和彦

書 記：石原明德

2) 指導医資格更新条件の一つである指導医会への出席義務について次の要望があった。

イ. 指導医会の日程を土・日に希望。

ロ. 開催地の問題。

ハ. 地方部会の中に指導医会を同時に新設してもらいたい。

との意見が提出された。学会運営委員会とも話し合いをしていく。

3) 検査士会側から指導医との話し合いの申し出があり、会合を行う予定になっている。

4) 細胞検査士資格更新業務について

指導医会の中の細胞検査士資格更新審査委員会が業務を行っているが、細胞学会へ移行すべきかどうか審議された。

会則見なおしとも関連があり、次の指導医会での検討課題とする。

5) 前指導医会で、指導医1：検査士3の基本的な形をわきまえて専任の指導医、教育の指導医と区別して複数制が承認されたが、具体的にどのようなにするかは今後検討していく。

C. 新指導医紹介

1993年(平成5年度)に認定された新指導医が席上にて紹介された。

D. 学術講演会

演 題：細胞診の精度管理

演 者：柴田偉雄(名古屋市立大学 臨床検査学)

司 会：杉森 甫 指導医会会長

編 集 後 記

会員がこの号を手にする6月初旬までには解決されていることを望んでいるが、オウム真理教が関連していることを示唆する凶悪事件が相次ぎ、日本は世界で一番安全な国とした「神話」は完全に崩壊してしまった。マスコミは、オウム真理教の中に高度な科学知識を身に付けた信者がいて、それら科学者がサリン製造や菌から毒素を取り出すためとしか思えない細菌培養などに携わっていたと報道している。これが事実とすると、たとえ宗教上の教えであろうとも科学者としての倫理観はどこに行ってしまったのか、不幸なできごととしかいいようがない。学問はしばしば象牙の塔として社会から隔絶しているように思われがちだが、倫理観あるいは社会価値観に根ざしていない学問は時に反社会的な結末を迎えることのあることを理解しなければならない。

以上をわれわれ細胞診指導医会に当てはめてみると、本会は細胞診断学あるいは細胞病理学を研究するグループと位置付けされると思うが、疾病診断としてまた老健法を通して一般社会とに接点を持っている。このことは、指導医会は単に学問を探求するばかりでなく、社会の要請に基づく活動の実践と必要に応じて社会（世論）を変革することも役目として持つことを示している。細胞診業務の法的整備などは、社会への働き掛けを早急に行わなければならない点と思われる。

今号には奥井勝二、野田 定、向井万起男、山田 喬の各先生から玉稿を頂いた。奥井先生は滝澤延次郎先生に続いて河合直次先生と御園生雄三先生をご紹介頂いているが、両先生を厳しい中にも温情溢れる指導者として捉え、千葉県における細胞診の今日の発展を築いた先駆者として位置付けされた。今回の千葉での学会にあたり、この地における細胞診の隆盛をみるときに感慨一入と思われる。野田 定先生は、近畿連合会会長として、近畿連合会の成立から歴史の変遷をご解説されているが、他の連合会あるいは県支部も今後の参考になる事項が多いと思われる。向井先生の「細胞診と宇宙飛行」はウイット溢れかつ細胞診としても核心を突く読物で、執筆を依頼した編集委員会としてもわれわれの考えをお汲み取り頂いた向井先生には感謝している。某団体より「今年度の素敵な夫婦」に選定されているが、これをお読み頂ければ、向井夫妻が選ばれた理由が理解できよう。山田先生の「一所懸命：細胞診狂祖物語」はご自分の“狂祖”ぶりと細胞診断学の流れとを、先生独特の軽妙な言い回しで表わされている。山田先生らしい一編といえよう。

本会報の編集後記を遡ってみると、型破りなことをした編集委員はいなかったが、今回はなにを書いてもよいとお墨付きを頂いたので、細胞診とは直接関係しないことから入り少しばかり冒険を試みた。学術書でないとの認識から、是非社会情勢と細胞診との関連を取り上げた投稿も期待したい。

(長谷川壽彦・平成7年5月8日 記)

細胞診指導医会会報編集委員会

委員長：柴田 偉雄

副委員長：長谷川壽彦

委員：藤井 雅彦, 垣花 昌彦, 坂本 穆彦, 山内 一弘